Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-30

アガサ・クリスティ作品における言語トリック―関連性理論による探偵小説の多重解釈分析―

中村，秩祥子

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2022-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7960号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007960

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式 3）

論　文　要　旨

氏　名　中村秩祥子
専　攻　グローバル文化
指導教員氏名　小松原哲太

論文題目（外国語の場合は日本語訳を併記すること）

アガサ・クリスティ作品における言語トリック―関連性理論による探偵小説の多重解釈分析―

論文要旨

アガサ・クリスティの探偵小説は、同時代の他の探偵小説のトリックが時代遅れとなって衰退していくなかで、今も変わらず非常に広く人気を博している。その理由は、世代を越え言語種を越えた言語トリックの巧妙さにある。読者は、探偵と同一の情報を与えられているにもかかわらず、探偵と同様の解釈ができない。本論文では、読者を探偵とは異なる解釈に誘導する表現法を言語トリックとして位置づけ、クリスティ作品の言語トリックのメカニズムを解明することを目的とする。「言語の決定不十分性」を提唱し同一文の多重解釈の可能性を認めている、Sperber and Wilson (1986/1995) による関連性理論 (relevance theory) を理論的枠組みとして援用し、同一の文章から、読者と探偵が異なる解釈をするプロセスの分析を行った。

第 1 章では、アガサ・クリスティとその探偵小説の基本的特徴と、探偵小説一般の解釈構造を概観した。さらに言語理論の発達の歴史を背景として、クリスティ作品の言語分析の先行研究の概要を述べ、その問題点を明らかにした。

第 2 章では、本論文の分析枠組みとして援用する関連性理論の概略と、分析の手法を具体例とともに説明した。

第 3 章では、作品最後に示される探偵の解決話において事件解決の手掛かりであるとされている表現をめぐって、読者が初読時にとる解釈プロセスと、解決話における探偵の解釈プロセスを比較し、その相違を考察した。特に、語彙の多義、修飾句による意味的制約の変化、品詞の変化、語句解釈の幅の変化、指標詞の指示対象の変化による言語トリックを考察した。これらの言語トリックの解釈プロセスは、表意復元における語用論プロセス、特に、曖昧性の除去と飽和、アドホック概念形成に相当する。語句の意味解釈は、想定によって変化する。クリスティは、読者が途中で探偵と同様の解釈を見出すことができないように、ある表現を読者が解釈するときに、その時点で与えられている情報だけでは探偵のような解釈には行きつけないようにしていることが分かった。さらに、橋渡し推意のような複雑な推論をしなければ、探偵と同じ解釈ができないように表現を巧妙にコントロールしている場合もあることが分かった。

第 4 章では、言語上では表現されていない部分の解釈が、言語トリックとして機能する例を分析した。不完全な文の復元部分、あるいは文法的に完全な文であっても意味的に言語表示以上の解釈を行うことが必要な部分において、読者と探偵の解釈プロセスの相違が生まれることを明らかにした。これらの省略の復元は、表意復元における飽和と自由拡充に当たる語用論プロセスに相当する。また、本章では、推意が問題となる、書式上の省略部分の解釈についても考察した。省略の復元においても、与えられた情報から作り出される想定が異なることから、読者と探偵の解釈の相違が生まれることが分かった。作品半ばでの情報と、作品最後で探偵が解決話をしているときに与えられている情報の量は異なっており、情報の量によって最適な解釈も異なることになる。読者は、それぞれの時点の情報による想定にもとづいて最適な解釈を引き出すので、情報不足により作品半ばでは解決話の解釈を見出すことはできないが、最終的に揃った情報にもとづく探偵の解釈には納得できるようになっていることが明らかになった。

第 5 章では、読者が正反対の推意を導き出すように発話をする登場人物の信頼度を変えたり、誤った推意に基づく想定を読者に与えて話を展開していったりすることで、読者の想定を操作するクリスティの言語トリックを分析した。クリスティが読者の想定を誤った方向に誘導する表現法の特徴は、記述的用法と解釈的用法の混在にあることが分かった。登場人物の解釈が入った解釈的用法の表現は、実は真実ではなかったということがあり得る。しかし、言語表現上で高次表意の部分が省略されている場合は、それが登場人物による解釈的用法なのか、あるいは事実を示す記述的用法なのか、読者には見分けがつかない。そのため読者は、登場人物による解釈的用法を誤って事実として解釈しまうことになり、探偵とは異なる解釈にミスリードされていく。

以上を要約すると、クリスティ作品の言語トリックは、読者が表現を解釈する想定をコントロールすることで、物語のなかで与えられている同一の表現から至ることが可能であるはずの探偵の解釈に、読者がすぐには至ることができないように制限しているといえる。クリスティの「プロットが巧妙」であるとは、複数の事項によって読者の想定を一定方向へ操作しているということを意味する。本論文では、このことを関連性理論の解釈プロセスの説明を用いて示した。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏　　名	中村　秩祥子
論 文 題 目	アガサ・クリスティ作品における言語トリック—関連性理論による探偵小説の多重解釈分析—
判　　定	合　格　・　不 合 格
論文チェックソフトによる確　認	☑ 確認 ☐ 未確認　　理由：

審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	委 員 長	教授	藤濤　文子
	委　　員	講師	小松原　哲太
	委　　員	教授	田中　順子
	委　　員	准教授	木原　恵美子
	委　　員		印

要　　旨

本論文は、アガサ・クリスティの探偵小説の考察を糸口として、これまで学問的に注目されてこなかった、探偵小説にみられる言語トリックのメカニズムの一端を明らかにしたものである。探偵小説では、読者に気づかれることなく、事件の手がかりとなる表現を物語のなかにちりばめる高度な言語技巧が用いられる。手がかりとなる表現は複数の意味で解釈でき、どの解釈をとるかによって劇的に異なる事件の全体像が描かれる。この種の言語トリックは、一意的な意味伝達を主な対象とするこれまでの言語研究ではほとんど研究されてこなかったが、言葉の意味解釈の柔軟性を示すきわめて興味深い言語現象である。

本研究の研究目的は、アガサ・クリスティの言語トリックをテーマとして、一般的な読者が行いがちである解釈と探偵が解決話において示す解釈を比較することで、言語トリックが成立する解釈のメカニズムを明らかにすることである。研究手法としては、関連性理論の枠組みを理論基盤として組み込み、クリスティ作品の言語トリックについて、一貫性のある分析と一般化を行っている。

序論で、研究対象を画定し研究目的を明らかにした上で、第1章で、アガサ・クリスティとその探偵小説の基本的特徴、探偵小説一般の解釈構造を概観し、先行研究の問題点を明らかにしている。第2章では、分析枠組みとなる関連性理論の概略と、分析の手法を説明している。第3章から第5章では、言語表現の多義性、省略の復元、登場人物の発話の信頼度という3つの観点から言語トリックの事例分析を行っている。第3章では、事件解決の手掛かりとなる言語表現をめぐって、読者が初読時にとる解釈プロセスと解決話における探偵の解釈プロセスを、「表意」の復元の観点から比較し、その相違を考察している。特に、語彙の多義、修飾句による意味的制約の変化、品詞の変化、語句解釈の幅の変化、指標詞の指示対象の変化による言語トリックを考察し、これらの言語トリックが、曖昧性の除去と飽和、アドホック概念形成に関する解釈プロセスの相違によって成立していることを明らかにしている。手がかりとなる表現は、その時点で与えられている情報だけでは探偵のような解釈には行きつけないように巧妙に制御されており、物語の後半になって得られる情報を勘案し、複雑な推論をしないかぎり、探偵が示す解釈には行き着けないことが、手がかりとなる表現が言語トリックとして機能する要件となっていることを示唆している。第4章では、言語上では表現されていない部分の解釈が、言語トリックとして機能する例を分析している。不完全な文の復元部分、あるいは文法的に完全な文であっても意味的に言語表示以上の解釈を行うことが必要な部分において、「表意」「高次表意」さらに「推意」の復元のプロセスの相違から、読者と探偵の解釈プロセスの相違が生まれることを明らかにしている。読者は、それぞれの時点の情報による想定にもとづいて最適な解釈を引き出すので、作品半ばでは情報不足により事件の真相に至ることはないが、最終的に揃った情報にもとづく探偵の解釈には納得できるようになっていることを、具体例にもとづいて例証している。第5章では、読者が事件の真相とはかけ離れた推意を導き出すように、発話をする登場人物の信頼度を変え、誤った推意に基づく想定を読者に与えて話を展開する言語トリックを分析し、この言語トリックの成立基盤が、記述的用法と解釈的用法の混在にあることを論証している。登場人物の解釈が入った解釈的用法の表現は、実は真実ではなかったということがあり得るが、言語表現上で高次表意の部分が省略されている場合は、それが登場人物による解釈的用法なのか、あるいは事実を示す記述的用法なのか、読者には見分けがつかないことが、言語トリックとしての役割を果たしていることを論じている。結語では、探偵小説の言語トリックを読者の解釈プロセスの誘導と制御によって成り立つものとして総括し、これが人間の記号解釈に関わる認知能力の特性を利用したものであることを示唆している。

以上の研究成果により、探偵小説の言語トリックの成立は、読者の解釈を誘導する表現技巧によって支えられていることが例証されたといえる。アガサ・クリスティの作品に限定された事例分析ではあるが、多くの作品の具体例を丹念に洗い出し、緻密な記述と分析を積み重ねている点は評価できる。なお、本博士論文に関連する業績として著書（共著）2編、論文2編（内1編は査読付き）、口頭発表3回がある。

本研究は、アガサ・クリスティ作品の言語トリックの事例分析を通じて、探偵小説における言語表現の多重解釈のメカニズムを研究したものであり、文学における言語技巧と意味解釈の多層性について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者の中村秩祥子は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。